

〈秋田支部第3回研究大会〉(3・4・21)

「空の空」は全面否定か

立花希一

I

『伝道の書』といえは「空の空」という言葉が直ちに浮かんでくるが、その主張者(コヘルト)は、本当に「一切が空しい」ということを訴えているのであろうか。「すべてが空しい」ならば、「すべてが空しい」と語ること自体もまた「空しい」ということになるはずであるという単純な論理的しっぺ返しはさておき、『伝道の書』を一瞥しただけでも、彼が多くくのポジティヴ(肯定的・積極的)な主張をしていることは容易にみてとれる。しかし、一見したところ相互に矛盾するような発言をしていることが、彼の真意を読み取ることを難しくしているのである。この発表では、「生死」と「労苦」の問題に限定して、彼の積極的な主張を剔出してみたい。「空」と訳されている言葉はヘブライ語では *hebel* で、元来は「息、風」を意味するが、その短さ、うつろいやすさから

転じて、「無益、無駄、空しさ」などを意味するようになった言葉である。ここではその意味をできるだけ広くとって、コヘルトによって「空」と断定された対象・行為は、「否定的評価」を受け、「否定的価値」を与えられたものであると考えることにしたい。例えば、「銀や金を集めることは空しい(価値がない)」「(二章八節)というわけである。さて、評価を下すには基準が必要である。それには目的、観点も関わってくるが、それを明確にする必要があるだろう。基準が異なれば、評価が逆転することもあるし、明確にしておかなければ、議論がかみ合わないということもあるからである。さらに、同じ基準で測ったとしても、その度合い、程度がどのくらいのものなのかという問いも生じよう。単純化していえば、全面否定なのか部分否定なのかという問いである。以上のことを念頭に置きながら、具体的に検討することにしよう。

II

先に、コヘルトが矛盾するような発言をしていることが障害になつていてという趣旨のことを述べたが、基準や観点を明確にしたり、程度を明らかにしたりするためには、一見矛盾するように見える複数の主張を比較検討するほうが、かえって好都合ということもありうる。争点が明確になるからである。生と死の問題についてコヘルトは、どんな主張をしているのであろうか。

人間は一人の例外もなく、死ぬものであるという事実には焦点が

あてられている。しかしこの事実だけから、「生は価値がない」という結論を導き出すことはできないはずである。コヘルトはどう考えているのだろうか。彼の発言を集めて表にすれば、

生は無価値

私は生者より死者を称える。今までに存在しなかった者は

その両者よりも良い。(四章二三節)

彼よりも流産の子の方が良い。(六章三節)

死の日は生まれた日よりも良い。(七章一節)

生は有価値

自分の時が来ないのに、何故死のうとするのか。(七章一七

節)

生きているものに属する者には希望がある。生きている犬

は死んだ獅子よりも良い。(九章四節)

コヘルトは「生」に対してアンビバレントではあるが、一ついえることは七章一七節から明らかなように「自殺」を肯定してないということである。もしかするとこの世に生まれて来ないほうが良いかもしれないが、生が全面否定されているわけではなく、生まれた以上は生を全うすべきであることが強調されている。ユダヤ教では自殺の禁止は最も重要な戒律の一つであり、自殺者は別の場所に葬られるという¹⁾。コヘルトの考えもその線に沿っている。このことだけでも、コヘルトが「全面否定」しているわけ

はないことは明白である。

では、死が訪れるまでの間、人がどのような生き方をしても同じ事であり、「すべてが空しい」とコヘレトは考えているのである。か。 「価値ある生」としてコヘレトが積極的に肯定している生き方はないのだろうか。それを次にみることにしたい。物質的富、快楽、知識などどんなものでも、われわれ人間は労苦 (Pain) せずに手に入れることはできないが、コヘレトはどんな労苦も「空しい」と主張しているのだろうか。

イスラエルの王であったコヘレトは、欲するものは何でも手に入れ、贅の限りをつくしたあげく、そのことについて「すべてが空しい」(二章一節)と述べているが、文字通りに受け取ってよいものなのであるか。そうではなさそうである。物質的富、快楽を追求する人々の中で、コヘレトは次のようなタイプの生き方を批判している。

「彼の目には富に飽くことがない」(四章八節)、「銀を愛する者は銀に飽くことがない。富を愛する者は収益に満足しない」(五章九節)、「金持ちも満腹しても安眠できない」(五章一節)。

それに対して、「働く者は少し食べても、多く食べても、その眼りは心地よい」(五章一節)と述べている。要するに、金銭、物質などの追求が自己目的化してしまった生き方を批判している。なのであって、生きるのに必要な物を働いて手にいれることを否定しているわけではないのである。コヘレトはきわめて現実的で、

現世的な生き方を肯定しているのである。²⁾

この観点から、「人には、食べたり飲んだりし、自分の労苦に満足を見いだすよりほかに、何も良いことがない」(二章二四節)という言葉を考えてみよう。「飲んで食ってちよん」という言葉があるように、人生がただそれだけなら何だか「空しい」という感じがし、コヘレトは実に悲観的で厭世的な見解の持ち主だと受け取れがちであるが果たしてそうであろうか。

これに類する言葉は繰り返し語られている。三章二一―三節、二二節、五章一八―一九節、八章一五節。しかも、こうした生き方ができるのは、「神のお蔭である」ということが添えられている。まさにこれがコヘレトの積極的な主張であると受け取れるのではないか。われわれ人間は老若男女を問わず、また金持ちも貧乏人も、賢い者も愚かな者も、労働し、飲みかつ食べて生を維持し、しかもそれを喜びとする。これは例外なく普遍的に、平等に人に与えられた「価値」ではなからうか。例えば、もし人生の目的が金持ちになることだったり、名誉や地位をうることだったりしたら、成功した一握りの人々の生き方だけに価値があることになり、圧倒的多数の人々の人生は「空しい」ということになってしまふ。それこそ空しい。「自己実現」を目指して、自分なりに働くことは誰もが現実的に可能である。コヘレトはこのことをいいたかったのではないか。『伝道の書』は古代イスラエルにおいて³⁾青少年を育成するための「教科書」として用いられたという。

- (1) *Encyclopaedia Judaica*, Keter Publishing House, Jerusalem, 1972, vol. 15, p. 490. 現在でもその制度が続けられている所もあるが、次第に減少しているようである。
- (2) コーレットは来世について懐疑的である。三章二一―二三節、一章一四節を参照のこと。
- (3) 比較思想学会秋田支部第二回研究大会(一九九〇年四月二八日)で小友聡会員が『伝道の書』を取り上げ、ローフィントクの説を紹介しながら、「空」概念の再評価を力説された。彼の発表がなかったら、この問題について私自身の見解を発表することは恐ろしくなかったであろう。ここに謝意を表する次第である。

(たちばな・きいち、批判的合理主義と信仰)

秋田大学助教授)